

種苗園社長の仲田さん(五)



「私たちが駅伝の第一走者のように復興に向けて走り出し、その輪を広げ、継続していきたい」。石川町の種苗園社長の仲田茂司さん(54)は、地域再生に向けて決意を語る。

同社は震災で農場のスプリンクラーが損壊、主力になりつつあった商品「野の花マツト」の生産が滞る事態になった。しかし、それにも増して深刻だったのは、原発事故に伴う風評被害。顧客の98%は首都圏など県外のため、商談のキャンセルが相次ぎ、4、5月の売り上げは前年比で半分程度にまで落ち込んだ。

「このままじゃつぶれてしまう」と危機感を募らせた仲田さんは、民間の研究所に依頼して農場の用水や土壌などの放射性物質を徹底的に検査。顧客に検査結果や新聞の放射線量分布図を示すなど丁

全国の催しで安全PR



寧に説明し、徐々に信頼を回復していった。

それでも放射性物質や風評被害に関する大きなニュースが流れると、その影響で商談が中止になったことがあった。仲田さんは「今後も判断を許さず、先行きへの不安は大い」と漏らしながらも、「風評被害に対しては後ろ向きではつぶされてしまうので、前に進むしかない」と真言葉通り、7月から同町や菓子製造会社などとともに風評被害克服キャンペーン「トップランナーISHIKAWA」を始め、首都圏で町産品の安全性をPR。このほかにも、全国のイベントに出店するなど攻めの経営を展開している。

「今後は地元とのスクラムを生かし、ぜひ県内向けの商品を提供したい」と意気込む仲田さん。復興の「トップランナー」の意欲は膨らむばかりだ。



町産品信頼取り戻す

商品を植える作業に励む仲田さん。「風評被害に対しては前に進むしかない」と意気込む